



小秋晴の日 (上)

永代美知代

—— 桔梗畑を歩く秋の野に ——

ほがらかな聲で歌ひながら、よしるは母親の後から草薙を背負つて、朝露を踏んで、山裾の小徑を往來の方へ出て來ました。と彼方から人力が一臺、幅廣リボンの美しい人をして此方へ來ます。

「オヤ！」

と思ふまもなく、がら／＼と車はよしるの傍を横切りました。

「さよならよ、よしるさん！」

車上の人は莞爾かに會釈した。おゝ希望にみちたその眼よ！

「まあ田鶴子さんだわよ、おつかさん！」

「また東京さいらつしやるんだらう」

「え、もう新學期ですもの」

よしるはじつと突立つたまゝ、遠ざかり行く田鶴子の車を見入つて、何時までも動きません。

「こうれさ、よし坊、早く歸つて早茶にしようよ」

さうは云ふものゝ母親も強て催

がすでもなく、同じやうに我子の傍に立ちました。女學校に入つてあつてまた寄宿舎へ歸つて行く田鶴子と違つて、親共の手助けに朝草を刈つたり、勝手元を立働いたり、そんなこんなに進ひ使はれて、折角好きな書物一つ讀む事も出来ないよしるの心を思ひやると何ともいへぬいぢらしさが胸一杯

つきあけて、母親はついほろりとしないでは居られませんでした。今の今まで、丁度今朝の天氣のやうに、歌までうたつて、ほがらかな氣持ちで居たよしるの眼元は、涙にうるんで、今にも泣き崩れさうな容子で居るではありませんか

「さ、早く歸らんぢや、のうよし坊！」

母親は無理と氣強く、先きに立つて歩き初めました。二三歩行つて、ふと振り返つて見ても、よしるはやつぱり化石のやうに突立つて居ます。

「こうれ！」

でもよしるが何とも返事をしないので、母親はわざと荒々しい聲で云ひました。

「また病氣をおこしたね」

「え」

よしるはハッキリ返事して、思ひ切つたやうに呼びかけました。

「ね、おつかさん」

「何だね」

「わたし、如何しても思ひ切れないわ、後生です、只、東京へやつて頂戴！」

「—— 馬鹿をお云ひでない、あれほどよく云つて聞かせて、お前も最う女學校へなんぞ行ける身分でない、あきらめてる筈ぢやないかね」

「だけれども、ねえおつかさん、だから只東京へやつて下さい、學費も何にもいりません」

「馬鹿をお云ひでない、學費がなく、東京へ行つて如何なるもんか」

「奉公します、苦學します」

「馬鹿をお云ひでないつて云ふに！」

「馬鹿々々つて、おつかさんは些少とも、私の云ふ事なんぞ取り合つて下さらないんだもの、つまらない！」

「さうとも、おつかさんはそんな閑人ぢやないからね、ホ、」

母親はすたすたと歩き出しました。

「おつかさん、餘りです、餘りです！」

よしるはがつくり、道芝の上に腰かけました。そして知らない振

して、其儘家の方へ歸つて行く母親の後姿を見て居るうち、熱い涙が、たまらなく、ぼたり、ぼたり溢れ落ちました。